

「校内研修プログラム」

参 考

研修シート（試案）の活用例については、モデル校が幼稚園２園、小学校３校、中学校３校であることから、高等学校の取組例は掲載していません。

今後、高等学校の取組例を含めて、全道の校内研修の取組の情報を収集し、お知らせしていきます。

研修シート(試案)の活用例

I - 1 発達障がいの特徴の理解

モデル校の取組(中学校)

～校内研修において、特別支援学校教諭を講師に教職員全員で取り組みました。

- ◎ ねらい
発達障がいのある子どもの学習の困難さを体験し、その心理や教師の指示の在り方を考える。

1 疑似体験 (教師役と子ども役、観察者に役割を分担して実施します)

演習1

※演習例

- ① 教師役が次のような長い文章を早口に口頭で説明します。

明日は札幌の円山公園に出かけます。7時45分にJR「余市」駅に集まってください。
余市駅発8時18分の列車に乗り、札幌駅着が9時31分、到着後は、地下鉄南北線、東西線を乗り継ぎ、円山公園駅下車、バスセンターまで歩き、そこから円15番動物園線、円山西町2丁目行きのバスに乗ります。円山動物園前で下車すると、すぐそこに動物園の入り口があります。
動物園に入るときは、私が皆さんに、動物園の地図と入場券を配ります。・・・

- ② このあと、教師役が子ども役に質問をします。
- ・余市駅を何時の列車に乗りますか。
 - ・地下鉄はどこで降りますか。
 - ・何番線のバスに乗りますか。
 - ・動物園まではどこ行きのバスに乗りますか。など

演習2

※演習例

準備：英文（61ページ参照）

教師役が英文（61ページ参照）をできるだけ早口で1回だけ読み聞かせます。
読み終えた後、どのような内容だったかを日本語で発表してもらいます。

2 振り返り (発達障がいのある子どもの心理面や教師の指示の在り方で気付いたこと)

- この演習はとても分かりやすく、生徒の戸惑う気持ちがよく分かりました。
- 生徒がどんどん追い込まれていく、そのつらさを実感しました。
- こうした体験を行うことで、どの教師も発達障がいの特徴を理解できると思いました。
- 教師が「ゆっくり話す」ということが、とても大切だと感じました。
- 「質問は後で受ける」ことを先に告げておくことが大切だと思いました。
- 生徒に伝える情報量を少なくしなければならないと思いました。

研修シート(試案)の活用例

I－2 実態把握、支援方法の検討

モデル校の取組(幼稚園)

～保育終了後に、教育局特別支援教育スーパーバイザーの助言のもと、関係職員で取り組みました。

◎ ねらい

実態把握や支援方法を検討し、指導や支援の留意点を考える。

1 実態把握

この項目や内容を参考に、気になる子どもの実態把握をする。

項目	内 容	該当する場合は○
長所	・折り紙を使った作品づくりなど、興味関心のあることには工夫しようとする。	
がんばろうとしていること	・友だちと同じように行動できるよう、友だちの様子を気にして見ている。	
言語発達が遅い		△
絵本や紙芝居を座って静かに聞くことが苦手である		○
数の理解が進まない		
相手の気持ちに気付かないことがある		△
集団活動が苦手である		○
人より、物に興味関心が強い		
衝動性が見られる		○
初めてのことや、初めての環境に戸惑うことが多い		○

(よくある場合は○、ときどきある場合は△としました)

2 支援方法の検討

上の表の項目を踏まえ、支援の方法について検討する。

- ・友だちと同じように行動できないとパニックを起こしてしまうため、時間内に終わらないときは、別の 手立てを知らせ、自分でできるのを見守るようにする。
- ・机に出す道具や授業の流れなどについて、絵やメモなどにより、視覚的に知らせる。
- ・思ったことをすぐ話してしまうことについて、どのように改善していくかを本人や保護者と相談していく。

3 振り返り (実態把握と支援方策の検討を通して、留意点として考えたこと)

- パニックを起こす場面を想定できたので、様々な対応を準備しておきたいです。
- 困ったとき、どのように教師に相談したらよいかを、本人に伝えておきたいです。

研修シート(試案)の活用例

Ⅱ－１ 個別の指導計画の作成

モデル校の取組(幼稚園)

～校内委員会で、特別支援学校教諭の助言のもと、関係職員で取り組みました。

◎ ねらい

個別の指導計画を作成し、書き方を考えるとともに、指導や支援の見通しをもつ。

１ 個別の指導計画作成の演習

子どものよさ(○)と 活動や生活上、困難なこと(△)		長期目標 (1年後を目標に)	
○ 走り回ったり、ジャンプしたりすることが得意である。 ○ 時計や蛍光灯を見るのが好きである。 △ 奇声を発して止めさせようとしても、聞き入れられない時がある。 △ なんでも口に入れて、感触を楽しむなどの行動がみられる。 △ うるさく感じると、耳をふさぎ、何も聞かなくなる。		・自分で出来ることを少しずつ増やしていく。 ・友達を意識できるように言葉かけをしたり、無理のないよう行動を促す。	
短期目標 (1～3か月後を目標に)	場面	○指導や支援の内容、方法	評価
お弁当を食べる準備を一人で完了できる。	お弁当の時間	○ 全体に対し、「ホテルのランチ」と称して、いっさいしゃべらないで食べるように促す。 ○ お弁当の準備の流れをホワイトボードで確認しながら行うようにする。	学級担任に声をかけられなくても、自分で確認して準備できるようになってきた。
友達に自分から声をかけて一緒に作業することができる。	ものづくりの時間	○ 全体に対し、しゃべる時はひそひそ声で近くの友達とだけにするように促す。 ○ 一緒に作業をはじめたら、ほめるようにする。	自分から声をかけるようになってきた。

２ 振り返り(個別の指導計画を作成して、気付いたこと)

- 短期的な目標と長期的な目標を考えておくだけで、あせらず、支援できると思いました。
- 今までは個別の支援だけに気を取られていましたが、全体への指導をきちんとした上で、個別に対応することを考えることの大切さがわかりました。

研修シート(試案)の活用例

Ⅱ－２ 個別の教育支援計画の作成

モデル校の取組(幼稚園)

～校内委員会で、教育局特別支援教育スーパーバイザーの助言のもと、関係職員で取り組みました。

◎ ねらい

個別の教育支援計画について保護者の理解や同意を得るための説明や相談の仕方を考える。

1 保護者に個別の教育支援計画作成の同意を得るロールプレイ

(学級担任役、コーディネーター役、保護者役、観察役に役割を分担して実施します)

【場面設定】

- ・絵本の読み聞かせなどの途中、立ち歩いてしまう子どもについて、当該の子どもの保護者と2回目の話し合いの場面
- ・1回目の話し合いで母親は「特別なことはしてほしくない」と話していた。
- ・そこで、次のような観点で教育相談を進め、最終的に個別の教育支援計画（それに代わるカードやノートなどでもよい）を作成することについて、同意を得ようとする場面

【教育相談を進める観点】

- お母さんの思いを聞く
 - ・自分で出来ることを少しずつ増やしてほしい。
 - ・友だちを意識できるように言葉がけをしたり、無理のないよう行動を促してほしい。
- お母さんに支援の内容や方法を提案する
 - ・お弁当の時間に用意する物の順番を絵で見せて、自分で用意できるようにしたい。
 - ・クラスの友達に物を配るお手伝いをさせることで、名前を覚えられるようにしたい。
- お子さんができるようになってきたこと、うまくいっていないことを確かめ合う
 - ・家では、お弁当の時間の持ち物を1つずつ手渡ししてバッグに入れさせているので、自分で確かめてできるようにしたい。
 - ・家では、友達が遊びに来た時に、おもちゃを友達に貸そうとするが、まだ名前を覚えていないかもしれない。
- 次の支援を一緒に考える
 - ・もし、幼稚園での絵で見せる支援で効果が見られたら、家でも同じように絵を順番に見せたり、片付け方を教えたりしてみたい。
- これらのことを記録しておくことのよさを話し合う
 - ・将来にわたって一貫した支援の見通しがもてる。
 - ・校種が変わっても、同じ説明を何度もしなくてもすむ。
 - ・学校と家庭で一緒に子どもの成長を確認できる。

2 振り返り(場面を演示して気付いたこと)

- 教師役を演じてみて保護者を説得するのではなく、子どもを中心に据え、お子さんにとって何が一番よいことかを保護者と共に考える姿勢が大切だと感じました。
- 保護者役を演じてみて、「この先生なら任せられる」と思えるかどうか大切だと感じました。

研修シート(試案)の活用例

Ⅲ－１ 学級づくり ① 指導や支援

モデル校の取組(中学校)

～生徒指導交流会で、学級経営や教科経営上の工夫について、教職員で交流しました。

◎ ねらい

通常の学級における発達障がいのある子どもへの配慮を含めた学級づくりの取組を交流し、指導上の課題や解決の方向性を整理する。

1 取組の交流

項 目	事 例	各項目ごとの学級づくりに関する取組交流
※記入例 もめごとやケンカを少なくする取組	※記入例 暴言を減らすために、学級担任が、教室の隅にビニール袋を貼り付けておき、誰かが言った暴言を担任は短冊に書き、それを子どもたちの目の前で破り、ビニール袋に投げ入れています。	○ 「できないことを笑わない」ことを生徒と共に取り組んでいます。
※記入例 叱り方に見通しをもたせる取組	※記入例 叱ることを最低限に減らし、毅然と叱るため、 ・人の心と体を傷つけたときは、ものすごく叱る ・できることをしないときは、叱る ・名札を忘れたときは、少し叱る など、叱る基準を4月に子どもたちに伝え、それを一年間守ります。	○ 叱る基準を生徒に明確に示しています。
※記入例 騒がしい教室を静かにする取組	※記入例 どの子も静かに集中して学習するために、「これから『サイレントモード』を始めます。1分です。」と言って静かにする時間をつくっています。また、どの子も静かに集中して活動するために、ひそひそ声でしゃべる時間も指示することがあります。	○ まず、教師の説明や指示を短くしたり、アイコンタクトやジェスチャーなどの非言語を使い、教師の言葉を減らしています。 ○ 授業の最初は必ず、どの生徒も集中して取り組める発問や作業を与えるようにしています。
※記入例 保護者との信頼関係づくりの取組	※記入例 4月当初から、教師から見た子ども一人一人のいいところをメモしておいたり、「お子さんのよいところや担任にのぞむこと」などについて保護者アンケートをとっておき、その情報をもとに、家庭訪問や行事等の機会に「お母さん、◇◇さん、よくがんばっています。□□が得意なんですね。」と声をかけることを大事にしています。	○ 保護者に学校から連絡をするときは、生徒の最近の様子やよさを先に伝えるようにしています。

2 振り返り(学級経営上の課題と解決策について、改めて気付いたこと)

- 教師が話す言葉を精選することが大事だと思いました。
- 先生方が取り組んできた生徒への配慮を交流し、共有財産にしていくとよいと思いました。

研修シート(試案)の活用例

Ⅲ－１ 学級づくり ② 教師の言葉がけ

モデル校の取組(幼稚園)

～会議終了後の短い時間で、教職員で「好意に満ちた言葉がけ」を交流しました。

◎ ねらい

通常の学級における発達障がいのある子どもへの配慮を含めた学級づくりの取組を交流し、指導上の課題や解決の方向性を整理する。

１ 実践の検討(「言葉がけ」を「好意に満ちた言葉がけ」に変える事例を検討し、子どもへの教師の言葉がけの在り方を整理する。)

	「言葉がけ」	「好意に満ちた言葉がけ」
1	「うるさい」	「A君、静かに待つのが上手だね。みんなはどうかかな？」
2	「さっき説明したでしょう。聞いていなかったの？」	「周りの友だちはどうしているか見てごらん」
3	「ちゃんとやらないといけません」	「みんなのお手本になってあげてね」
4	「早くしないと間に合わないよ」	「早く準備できた人から順番に、シール手帳を取りに来てください」
5	「片付けなさい」	「片付けが終わったら、〇〇に遊びに行きます。みんなで片付けるとたくさん遊べるよ」
6	「触りません」	「今日は、見るだけです」
7	「A君、列からずれているよ」	「A君、前の友達の肩を見てね」
8	「ちゃんと座って」	「A君の座り方、かっこいいね」
9	「横入りしないで」	「友達の後ろに並ぶと順番がくるよ」
10	「また、忘れたの」	「気を付けていたのに忘れたんだね。今度は持ってきてね」

２ 振り返り(教師の言葉がけについて、改めて気付いたこと)

- 書き出すと改めて気付くことがあり、子どもが前向きになる言葉がけをしていきたいです。
- 言葉遣いに気を付けていたつもりでしたが、きつい言葉が多かったことに気付きました。
- 「好意に満ちた言葉がけ」の中で、いい言葉だなと思った言葉は、みんなが「なるほど!」と思い、「座布団1枚!」という声もあり、楽しく交流できました。

研修シート(試案)の活用例

Ⅲ－１ 学級づくり ③ 障がいの理解

モデル校の取組(小学校)

～学級経営交流会で、障がいの理解を深める取組について、担任同士で交流しました。

◎ ねらい

通常の学級における発達障がいのある子どもへの配慮を含めた学級づくりの取組を交流し、指導上の課題や解決の方向性を整理する。

１ 子どもたちに、障がいの理解を深める取組の交流

項目	取組事例	各項目ごとの取組交流
※記入例 発達障がいのある子どもが学習や生活を行っていく上で困難なことの体験	※記入例 ○聞いた内容を正確にメモすることの難しさの体験 ○複雑で量の多い文章を読むことの難しさの体験 ○友達を遊びに誘うのにうまく伝えられず、受け入れてもらえなかった体験	○総合的な学習の時間における点字やアイマスクの体験、車椅子の体験 ○学級活動におけるコミュニケーション不足がトラブルのきっかけとなる体験
※記入例 一人一人のよさの理解	※記入例 ○子ども同士が、一人一人のよさについて理由を述べて学級全体に説明する機会の設定 ○子ども一人一人の個人目標を、学級全員が確かめる機会の設定	○帰りの会における子ども同士が、一人一人のがんばりについて発表する機会の設定 ○子ども一人一人の個人目標を教室内に掲示し、折に触れて確認

２ 保護者に、障がいの理解を深める取組の交流

項目	取組事例	各項目ごとの取組交流
※記入例 一人一人のよさの啓発	※記入例 ○保護者会等で、子ども一人一人のよさや違いを認め合う学級づくりを行うことについての説明 ○お便りなどで、子ども一人一人のよさを紹介する機会の設定 ○子ども一人一人に活躍の機会を与える場の設定	○保護者会で、別紙資料を活用して、子ども一人一人の違いを踏まえ、よさを認め合う学級づくりを行うことについて説明 ○学級通信で、子ども一人一人のよさを紹介

３ 振り返り (発達障がいについて、子どもたちや保護者の理解を深めるために行うこと、また、改めて大切にしたいこと)

- 他の学級の取組やその留意点を聞くことができて、とても参考になりました。
- 他の学級の取組で参考になったことを自分の学級でも生かしていきたいです。
- 保護者に対し、最初の段階で丁寧に説明しておくことの大切さを改めて実感しました。

研修シート(試案)の活用例

Ⅲ－２ 授業づくり

モデル校の取組(小学校)

～校内授業研で、指導案上に配慮の計画を記載し、授業後に全校で検討しました。

◎ ねらい

通常の学級における発達障がいのある子どもへの配慮について考え、授業づくりで心がけていくことを整理する。

1 授業中の配慮

過程	子どもの主な学習活動	本時における教師の配慮の計画
導入	■ 子どもが何を、どのように学ぶかを見通すことができる。	☐ 全体への配慮 ・全員の子に分かりやすいよう、簡潔な発問、指示をする。 ☐ A君への配慮 ・教師の説明が分かったかどうか確かめる。
展開	■ 子どもが目標の実現に向けて、主体的に学習することができる。	☐ 全体への配慮 ・しゃべらないで、集中して学習するように伝える。 ・実物投影機を使うなど、視覚的支援を行う。 ☐ A君への配慮 ・アイコンタクトやジェスチャーで励ましや注意をする。
終末	■ 子どもが学習を振り返り、何を学んだのかを自覚することができる。	☐ 全体への配慮 ・練習問題により、一人一人の状況を確認し、不十分な場合は、繰り返し指導する。 ☐ A君への配慮 ・A君なりのがんばりをほめる。

【授業全般を通した配慮の例】

- 教師の発言
 - ・教師の言葉を減らす、好意に満ちた言葉がけとなるよう心がける など
- 板書
 - ・大事なことは線で囲む、ノートのマスや行に合わせる、色分けする など
- プリント
 - ・読みやすい位置で改行する、写真や絵の境目をはっきりする、振り仮名を大きくし、読みやすくする など

2 振り返り

- 教師の話す言葉を減らしていくと、子どもたちが集中するということを実感しました。
- しゃべらない静寂の時間により、子どもたちが学習に集中していて、素晴らしかったです。
- 最後にA君にアイコンタクトでほめていたところは、A君も嬉しそうにしていました。改めて、教師が発する言葉は、好意に満ちた温かい言葉であることが大切だと実感しました。

研修シート(試案)の活用例

Ⅲ－３ 園内の連携

モデル校の取組(幼稚園)

～園内研修で、職員一人一人のA君へのかかわり方を、職員全員で考えました。

◎ ねらい

園全体で取り組む発達障がいのある子どもへの指導や支援の在り方を検討する。

1 A君への教職員一人一人のかかわり

※ 学級の中だけの対応から、園全体で組織的に対応していくため、職員一人一人が時間帯によって、どうかかわれるかを考えてみる。

	担任	副担任	園長	主任	担任以外の先生	預かり保育担当者
登園時	・挨拶をし、今日の様子を見る。	・身支度ができるよう、絵カードを見せる。	・保護者から、家庭での様子を聞く。 ・担任と副担任に伝える。			
自由遊び		・遊べるよう働きかける。				
全体保育	・必要に応じて、支援する。	・教師の説明を、絵カードで伝える。	・必要な支援を行う。	・担任と連携を図り、必要な支援を行う。	・別のクラスに入ってきたときは、自分のクラスに戻れるよう支援する。	
お弁当		・落ち着きがなくなったら、必要な支援を行う。				
片付け	・必要に応じて、支援する。	・認める声がけをする。			・別のクラスに入ってきたときは、自分のクラスに戻れるよう支援する。	・危険な様子が見られときは、側に寄り添う。
預かり保育	・担当者に引き継ぐ。					・遊びを一緒にしたり、見守ったりする。
降園時	・保護者に今日のがんばりを伝える。			・玄関までの移動を見守る。		・困っているときは絵カードを見せる。

2 振り返り (園全体で支援を行うために心がけること)

- シートを使って整理することで、それぞれの職員の対応がバラバラであったことに気付きました。
- 発見したことや、できるようになったことを近くにいる職員が認めることが大切だと思いました。
- 支援とその結果を伝え合い、一層連携して支援を行う必要があると実感しました。

個別の指導計画を作成しよう！

校内委員会において、通常の学級に在籍する子どもに特別な教育的支援を必要とすると判断した場合、一人一人に応じた個別の指導目標、指導や支援の内容等を盛り込んだ「個別の指導計画」を担当が中心となって早急に作成し、組織的・計画的に指導や支援を行っていく必要があります。

個別の指導計画（記入例）

学 年 小学3年

氏 名 北海太郎

子どものよさ（○） 学習や生活上、困難なこと（△）	長期目標 （1年後を目標に）
○ 算数の計算問題が速くできる。 ○ 見通しがもてると、集中して取り組むことができる。 △ 全体への指示を聞き取って行動することが難しい。	・説明や指示を聞き取って行動できる力を高める。 ・学校生活のルールを守って、行動することができる。

★指導や支援の見通しがもつことができます！

- ・子どもの実態を的確に捉え、長期目標や短期目標、指導内容や方法等を明記することで、指導や支援の見通しがもてます。

★PDCAの取組につながります！

- ・評価をもとに、指導目標を見直したり、指導や支援の質を高めたりすることにつながります。

短期目標 （1～3か月後を目標に）	場 面	指導や支援の内容、方法	評 価
・集中できる時間が長くなるようにする。	・授業中	・何をするのか、見通しを示し、集中できるようにする。 ・教室の音を減らし、教師の言葉も少なくし、集中できるようにする。	・30分以上は座っているようにできている。
・持ち物を自分で片付けることができる。	・授業中 ・学校生活	・持ち物の片付け場所を決める。	・少しずつ片付けることができるようになってきている。

★校内の共通理解ができます！

- ・校内委員会で個別の指導計画を作成したり、見直したりすることで、校内の教職員の共通理解を図ることができます。

★個別の教育支援計画の作成につながります！

- ・個別の教育支援計画の様式の一部を活用したり、転記したりすることで、個別の教育支援計画の作成につなげることができます。

※ 個別の指導計画の作成と活用にあたって、「校内研修プログラム」の研修シート（試案）Ⅱ－1、Ⅳ－2を活用した研修を行うことが大切です。

※ このような簡便な計画でよいので、「まずつくる」ことから始めることが大切です。

個別の教育支援計画の作成を目指そう！

校内委員会において、通常の学級に在籍する子どもに特別な教育的支援を必要とすると判断した場合、本人・保護者の同意のもと、一人一人の教育的ニーズを把握し、医療、保健、福祉、労働等の関係機関との連携を図りつつ、「個別の教育支援計画」を作成し、乳幼児期から学校卒業後までの一貫した教育的支援を行っていくことが大切です。

(様式〇)

個別の教育支援計画

～就学移行期用シート～

氏名	北 海 太 郎	性別	(男)・女	生年月日	平成〇〇年〇〇月〇〇日	
作成者	保護者	北 海 一 郎 (父)			在園名	〇〇〇幼稚園
	学 校	〇 〇 〇 〇 (〇〇町立〇〇小学校)			就学先	〇〇町立〇〇小学校
	教育委員会	〇 〇 〇 〇			作成日	平成〇〇年〇〇月〇〇日
	関係機関等	〇 〇 〇 〇 (発達支援センター)			修正日	平成〇〇年〇〇月〇〇日

● 本人・保護者の願い等	
本人の願い	保護者の願い
将来の夢 ・お父さんのように、がんばって働けるような大人になりたい。	将来の夢 ・就職して、自立した生活を営んでほしい。
興味関心 ・電車の図書やDVDの鑑賞。	就学先 ・〇〇町立〇〇小学校 (通常の学級)
	学 校 ・自分の思い通りにならなくても、パニックを起こさずに、落ち着いて学習に取り組んでほしい。
	生活等 ・自分の気持ちを言葉で表現できるようになってほしい。 ・円滑な人間関係が築けるようになってほしい。

支援の内容		資料
言語聴覚士による言語訓練		p.〇
少人数の集団によるロールプレイトレーニング		p.〇
個別の教育支援計画・指導計画の作成・活用		p.〇
幼稚園の担任教諭に対する指導方法等の助言・援助		p.〇

③ ・発達の段階等の把握 通立特別支援教育センター

● 教育的ニーズの選定	
・本人の言語発達の状態やこだわりの強さなどの特性を踏まえた学級学力を身に付ける。 ・担任及び支援員の支援を受けながら、友だちと一緒に活動する経験	

● 就学先の学校における合理的配慮の内容 (平成〇〇)		
観 点	支援の内容	備 考
教育内容	学習上又は生活上の困難を改善するための配慮 ・「適切な対人関係の困難さ」や「言語発達の遅れや異なる学習内容の習得の困難」	・個別の指導計画の作成 ・支援員と連携した指導
教育方法	学習のペース、必要に応じた休息、必要に応じた休息、必要に応じた休息	・変更・調整の内容を個別の指導計画に明記 ・支援員による写真や図画等の提示
支援体制	専門性のある指導体制の整備 ・指導方法等について〇〇養護学校から助言を受ける。 ・通立特別支援教育センターの教育相談に担任も同行する。	・予定表の作成は家庭にも協力を依頼 ・全教職員に周知
施設・設備	校内環境のバリアフリー化 ・発達、障がいの状態及び特性等に応じた指導ができる施設・設備の配慮 ・災害時等への対応に必要な施設・設備の配慮	・専門家からの助言内容を全教職員に周知 ・発達、障がいの状態及び特性等に応じた指導ができる施設・設備の配慮 ・災害時等への対応に必要な施設・設備の配慮

★本人・保護者が一貫した支援の見通しをもつことができます！
 ・関係機関や学校等が共に支援内容を考えることで、将来にわたっての支援の見通しをもつことができます。

★保護者が支援者と共に子どもの成長を確かめることができます！
 ・子どもの育ちを一步一步記録することで、支援者と共に子どもの成長を確かめることができます。

★必要な支援や環境づくりの工夫等が引き継がれていきます！
 ・必要な支援や環境が次の校種や進路先に引き継がれていきますので、保護者が何度も同じ説明をしなくて済みます。

★個別の指導計画の作成につながります！
 ・個別の教育支援計画を作成することで、その一部を個別の指導計画とすることができます。

※ 管内や市町村で個別の教育支援計画の様式（74ページ）を示している場合は、その様式を参考にしてください。

※ 個別の教育支援計画の作成に当たり、本人・保護者の同意が得られない場合は、校内研修プログラムを活用した研修を行い、個別の教育支援計画の利点を丁寧に伝えるなど、保護者の理解を得られるように努める必要があります。

なお、北海道教育委員会としても、各市町村を通じて、就学前の早期段階から保護者に対し、個別の教育支援計画の意義について意識啓発を推進していきます。

道内の各管内・各市町村版の「個別の教育支援計画」の様式

平成27年1月20日現在

	管内版 個別の教育支援計画の様式	市町村版 個別の教育支援計画の様式
空 知	○空知版個別の教育支援計画 「スタートシート(試用版)」	○妹背牛町「もせっこ母子手帳+(ぶらす)」 ○栗山町「支援ファイルくりっこ」 ○秩父別町「ステップ♪ちっぴ 母子手帳+(ぶらす)」 ○夕張市「未来手帳」
石 狩	○個別の教育支援計画の作成例 ○個別の教育支援計画の作成・活用術	○千歳市「黄色いファイル」 ○石狩市「サポートブック」
後 志	○個別の教育支援計画(モデル・後志案)	○小樽市「とむとむファイル」 ○京極町「相談支援ファイル」 ○蘭越町「はばたきシート」
胆 振	○個別の教育支援計画～胆振モデル～	○白老町個別の教育支援計画 ○安平町個別の教育支援計画 ○厚真町個別の教育支援計画 ○苫小牧市個別の教育支援計画 ○登別市個別の教育支援計画 ○伊達市個別の教育支援計画
日 高	○日高教育局 「個別の教育支援計画(モデル案)」＜小学校＞	
渡 島	○個別の教育支援計画の作成例	○知内町「相談支援ファイル『結』」 ○函館市個別の教育支援計画 ○八雲町「育ちと学びの応援ファイル カラフル」 ○七飯町「育ちと学びの支援ファイル まっぶる」 ○鹿部町「教育支援ファイル いずみ」
檜 山	○個別の教育支援計画の作成例	○今金町個別の教育支援計画
上 川	○上川版個別の教育支援計画「すくらむ」	○旭川市「育ちと学びの応援ファイル すくらむ」 ○士別市「子育て応援ファイル すくらむ」 ○名寄市「育ちと学びの応援ファイル すくらむ」 ○富良野市「子どもの成長記録ファイル すくらむふらの」 ○東神楽町「子育てサポートファイル えんじん」 ○当麻町「育ちと学びの応援ファイル すくらむ」 ○比布町「育ちと学びの応援ファイル いちごっ子ファイル」 ○愛別町「育ちと学びの応援ファイル すくらむ・すくらむ」 ○美瑛町「子育てファイル すとりーむ」 ○上富良野町「育ちと学びの応援ファイル すくらむかみふ」
留 萌	○留萌版個別の教育支援計画「つなが一留」	
宗 谷	○個別の教育支援計画(宗谷版)	○枝幸町「カラフルクレヨン」
林-ツ	○オホーツク版個別の教育支援計画「育ちの手帳」	○清里町「教育支援計画 育ちの手帳」 ○大空町「個別の教育支援計画」 ○置戸町「育ちの手帳 はばたき」 ○湧別町個別の教育支援計画「育ちの手帳」
十 勝	○十勝版個別の教育支援計画「かちっと」	○芽室町「子育てサポートファイル「めむたっち」」 ○鹿追町「鹿追町個別の教育支援計画(支援カルテ)」 ○広尾町「広尾町個別の教育支援計画」 ○池田町「池田町版個別の教育支援計画「かちっと」」
釧 路	○釧路版個別の教育支援計画「マリーモ」	
根 室	○根室版個別の教育支援計画	○羅臼町「こんぱす」 ○根室市「子育てファイルりんくす・ねむろ」

◇◇◇発達障がいのある子どもへの指導や支援に関するICTの活用◇◇◇

通常の学級に在籍する発達障がいのある子どもの中には、授業中における全体への指示を理解することや、文章教材の内容を理解することが難しいなどの傾向がみられます。その場合、実物投影機やタブレット端末などのICT機器を活用し、絵や文字を使って視覚的に分かりやすい指示を行ったり、写真やプリントを使って順を追って説明したりする方法が考えられ、こうした方法は、学習上の困難を軽減し、学習内容の理解を深めるのに効果的です。

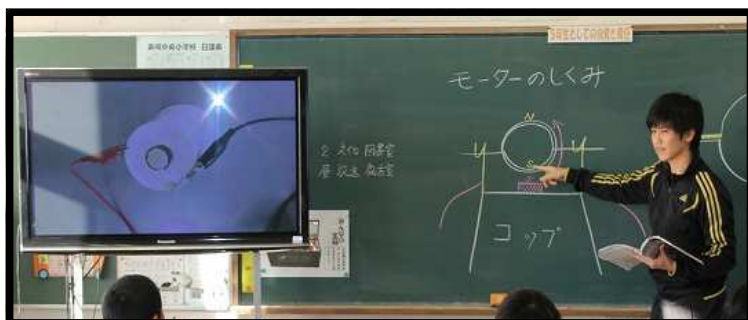
各学校においては、例えば、本校内研修プログラムの「Ⅲ－２ 授業づくり」のシートをもとに、ICTの活用について、次のようなミニ研修を行うことが考えられます。

（１）授業における実物投影機の活用例



ワークシートやノートを大きく映す

ワークシートやノートの書き方について、書き方がわからない子どもへの参考となるよう、見本となる子どもの書き込みを大きく映して見せました。



動きを大きく映す

理科におけるモーターの動きについて、どの子どもも理解できるように、板書と連動させて、モーターの動きを演示して見せました。

（２）実物投影機の活用に関する校内研修の取組例

効果的な映し方を話し合う

大きさや映し方について、子どもたちの実態に照らして、実際に使用しながら考えました。



模擬授業を行う

見せ方や説明、発問などについて、授業の目標と子どもたちの実態を踏まえ、模擬授業を通して考えました。



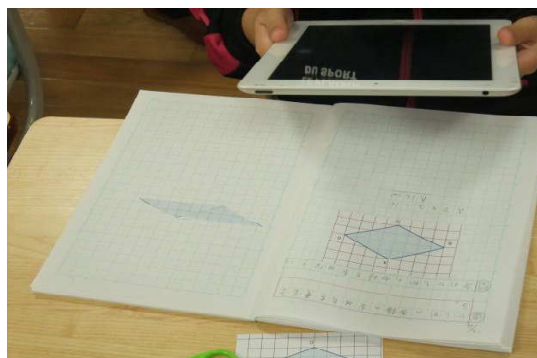
(3) 授業におけるタブレット端末の活用例

学習の見通しをもつ



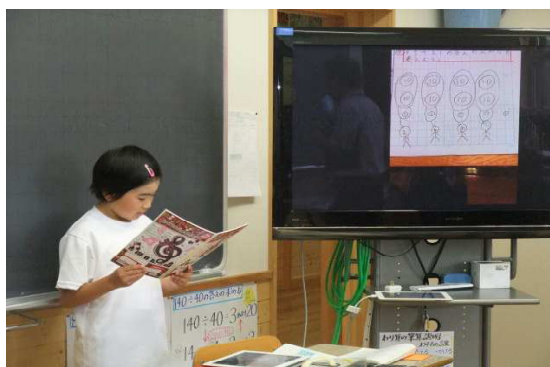
学習の見通しをもつことが難しい場合、単元全体の学習の流れをその都度、画面で再確認し、スムーズに学習に取り組めるように支援しました。

学習を記録する



これまでの学習を振り返る際、より鮮明に思い出せるよう、ノートや操作活動を撮影し、学習の記録として残すよう支援しました。

発表に使う



子どもが自らノートに書いたことをテレビ画面に大きく映すなどして、わかりやすく説明できるよう支援しました。

学習の習熟を図る



授業の終末の練習問題において、自分の力に応じたタブレット端末上のドリル問題に取り組むよう、支援しました。

ICT(実物投影機、タブレット端末、電子黒板等)を活用する際の留意点

- 授業の目標を踏まえ、「どの場面で、どのように」活用するかを考えます。
- 活用することで、子どもたちが操作だけに集中してしまったり、学習活動が、授業の目標からはずれてしまうことのないよう注意します。
- 模擬授業等により、実際に映してみる、活用してみることで指導上の留意点を考えていく必要があります。

「発達障がいのある子どもとあったかクラスづくり」

プール学院大学准教授 松久眞実先生

平成26年8月27日(水) 13:20~16:00

北海道立特別支援教育センター大研修室 参加者65名

公開講義の概要

- よくある「ユニバーサルデザイン」の取組の一つとして、例えば視覚支援のカードを黒板に貼ったとしても、いくらスケジュールを提示したとしても、子どもたちが教師を尊敬、信頼していない限り、教師の指示は通らずクラスは落ち着きません。「視覚支援・見通し・構造化」などの特別支援教育の『ハード面』と、『ソフト面』にあたる「教師のほめ方・叱り方・教師の立ち振る舞い・わかりやすい指示の出し方・信頼される教師になること」は車の両輪でどちらも欠かすことはできません。
- いかに子どもたちを興奮させずに、落ち着いて勉強に取り組ませるか、それをいつも念頭において授業しています。そのためのポイントは「教室を低刺激にする」ことです。視覚や聴覚の刺激を減らすこと、その中の一つは「教師の言葉を減らす」ことです。教師の説明が長く、修飾語が多いと、子どもたちは大事な言葉を聞き逃します。特に、発達障がいのある子どもは、焦点化することが苦手で、優先順位が付けられないことが多いです。教師の言葉を減らせば減らすほど、教室が静かになり、挙げ足を取られる可能性が減ります。私は注意する言葉、ほめる言葉でさえも、なるべく非言語、ジェスチャー、アイコンタクト、ひそひそ声で伝えるようにしています。
- 私は叱り方をとても大事にしています。感情のまま叱っていると必ず失敗します。
私が新任だった頃には、感情のまま叱っていても、子どもたちは「僕たちの将来を心配して叱っている」という私の意図をなんとなく想像してくれました。でも、発達障がいの子どもは、相手の気持ちがわかりにくく、字義通りしか言葉を理解できない傾向がみられます。
- 私は叱る基準を「森レベル」「林レベル」「木レベル」の3段階に分けて緩急を付けていました。「木レベル」では、ほとんど叱りません。だからこそ「森レベル」が際立つわけです。何でもかんでもガミガミ叱っていたら、大事な時に効き目がありません。この叱る基準は1年間変えません。先生が必ず叱ること、決して叱らないことがはっきりと示されている教室は、子どもたちにとって居心地がよいのです。
- 私が悪意に満ちた言い方をしているとクラスがギスギスしてきます。好意に満ちた語りかけをしていると、やがて子どもたち同士にも、好意が芽生えてきます。



【講師 松久眞実先生】

参加者の感想

- 前にも先生の話聞きまして、先生が言われた「音を少なくする」ということをやってみました。朝読書や授業を子どもたちが落ち着いて取り組むなど、成果がみられています。
- 指導や手立ての部分先生方に広めていきたいと思いました。

「崩れない学級づくりとは ～発達障がいのある子どもをつつむクラスづくり」

プール学院大学准教授 松久眞実先生

平成27年1月30日（金）12：50～16：00

北海道立特別支援教育センター大研修室 参加者78名

公開講義の概要

- ある先生は、学級が崩れていた時を振り返り、「個々の子どもばかり見ていて、全体を見ていなかった」と述べていました。このことから、まず、全体を落ち着かせること、その上で個別の対応を考えていくことが大事であることが分かります。学級が崩壊すると、発達障がいのある子どもが、いじめの標的になったり、非行に走ったり、不登校になってしまう事例が少なくありません。まず、学級全体を落ち着かせることです。そのためには、「教室の刺激を減らす」「叱り方・ほめ方を工夫する」「好意に満ちた語りかけを増やす」などの取組が大切です。
- 発達障がいのある子どもたちは突然叱られるのが苦手な傾向があるので、教師がいつ怒るか分からないと不安になります。私は、叱る基準を3段階に分け、4月に子どもたちに示し、1年間この基準を変えませんでした。この基準を示すことは子どもにとっての見通しになり、教師である私も、自分を律することになりました。叱る基準がぶれないことは、教師にとっては難しいことですが、筋が通った指導となり、子どもたちは叱られても納得してくれました。
- また、発達障がいのある、どのタイプの子どものとっても、しつこく叱られるのは苦手な傾向がみられます。教師が感情的に叱ると、子どもの心が教師から離れていきます。「毅然とあっさり叱る」「頭ごなしに叱らない」「ついでにあれこれ叱らない」「皮肉、脅し、威嚇をしない」ことなどに心がけることが大切です。
- がんばった行動をほめる時には、「事実の確認と承認の非言語」が効果的です。例えば、いつもノートを開かない子が、たまたま自分から開くことができた時に、「すごい、自分から開いたね」とほめると、周りの子は「自分たちはいつも自分から開いているのに、なんであの子だけほめるの。」と不満に思います。その時は、その子に「自分でノート開いたね」と事実を認める言葉をかけ、すかさず、非言語でにっこりと微笑みます（又はOKサイン等）。他の子にとっては事実をただ言葉に出しているだけですが、本人には「先生が認めてくれた」と感じるができます。
- ほめ方にも工夫が必要です。「偉いね」「すごいね」「上手だね」等の言葉は、確かにほめてはいるものの、誰かと比べている、誰かより勝たなければならない等のイメージを与えてしまいがちです。反対に「先生は、うれしいよ」「先生は助かるよ」などというアイメッセージでほめると、「先生に感謝されている」とやる気になることが多いです。
- 教師は叱ることによって、子ども達が気持ちを奮い立たせることを期待しています。しかし、学級全体を叱れば叱るほど、子どもたちは「私たちの学級は、最低の学級だ」と思います。逆に学級全体をほめればほめるほど「この学級でよかった」と思うようになり、明るく暖かい学級になっていきます。教師が、子どもを信じ、子どもの言い分を聞き、責めないことを大切にした「好意に満ちた言葉がけ」を大事にしていると、やがて好意に満ちた学級に変わっていきます。



【講師 松久眞実先生】

参加者の感想

- 前回、松久先生の御講演を教職員全員で聞きました。松久先生のお話により全員が共感し、教職員が言葉を減らしたり、叱る基準を示したりするなどの取組を始めました。すると、子どもたちも落ち着いてきて、このことは確実に保護者にも伝わっています。本日、教えていただいた「叱り方・ほめ方の工夫」「肯定のアイメッセージ」も取り入れて、「好意に満ちた学校づくり」に努めていきます！

ペアレントメンター（親の相談にのる先輩の親）から 先生方へのメッセージ

ペアレントメンターからの先生方へのメッセージをQ & A方式で紹介しますので、先生方が保護者と接する際の参考としてください！

ペアレントメンターより先生方へ

私たちペアレントメンターは、障がいのある子どもをもつ先輩の親で、悩みをもつ親の相談に対し、その気持ちに寄り添い、共感し応援したりしています。

私たちから見て先生方は、どの先生も、意地悪な気持ちでの言動はしていないと思っています。ただ、日々お忙しい仕事の中、冷静な気持ちと余裕をもつことができず、先生の残念な言動を見たり聞いたりしてきました。そのことにより、一度受けた保護者の傷は想像以上に深いものです。

そのため、先生方には、「校内研修プログラム」で研修を積まれ、御自身の言動を振り返って、受ける側である保護者の気持ちに一層気を付けていただけると嬉しいです。

私たちペアレントメンターは、子どもや保護者のために勉強され、謙虚で誠意ある対応をしてくださる先生方を全力で応援していきます！

Q 1 先生が、保護者と接する時、保護者の立場から、「言ってほしくない言葉」や「してほしくない対応」があれば、教えてください。

A1

【言ってほしくない言葉】

- 子どもの名前を呼び捨てにしないでほしいです。（「さん」付けにしてほしい。福祉の世界では、呼び捨ては禁止用語となっています。）
- 「ほかにも特別な対応が必要な子どもがいますので、あなたのお子さんにだけ、特別な対応をすることはできません。」という否定的な発言。
- 「◇◇君より大変な子どもがいます。だから心配ないでしょ。」という他の子と比べる発言。
- 子どもの発達を心配し、不安になっている保護者に対する「大丈夫です。」「普通ですよ。」など、根拠のない安易な発言。
- 「△△君はこうですから。」と診断名だけで決め付ける、「障害があるから。」とすぐに特別支援学級を勧める、「お子さんは普通学級にいるべきではない。」という発言。
- 不登校気味の子が勇気を出して登校した時、「なんだお前今頃来たのか。」という冷たい発言。

【してほしくない対応】

- 対応が難しいと感じる子どもをすぐに特別支援学級に送り込もうとする。
- 毎日のように、先生が保護者に電話をしてきて、学校での出来事をガミガミと言う。
- 「授業中、お子さんは、ちゃんと前を向いて話を聞いているので、心配いりませんよ。」や、「何が問題なんですか。」と言われ、こちらから話をさせてくれない。

Q 2 先生が、保護者に、個別の教育支援計画の作成や活用について同意を得ようとする場合、どんな姿勢で接するとよいでしょうか。

A2

- 卒業後、福祉の世界では、個別の支援計画は当たり前です。保護者の目線に立ち、教師として熱意をもって説明し、作成すること、活用することの同意を得てほしいです。
- 例えば、療育や学校教育等の記録を細かくとっている保護者も多いことから、「参考にさせていただいてよろしいですか。」という働きかけから、相談していくことも考えられます。
- 個別の教育支援計画は、例えば、20歳で請求する障害基礎年金の大切な情報となることも柔らかに説明し、大切な資料であることを伝えてほしいです。
- 個別の教育支援計画を活用することで、
 - ・将来にわたっての一貫した支援の見通しがもてる。
 - ・学年や校種が変わるたび、関係機関に相談に行くたびに、同じ説明を何度もしなくても済む。
 - ・学年や校種が変わっても、必要な支援が引き継がれていく。
 - ・支援者と一緒に子どもの成長を確認できる。などのメリットがあることを説明してほしいです。
- 「子どもにレッテルを貼ることではない。」、「将来不利になることはない。」、「情報が漏れることはないので安心してほしい。」ことを伝えてほしいです。

Q 3 本校内研修プログラムを活用し、先生方が発達障がいのある子どもや、その可能性がある子どもへの指導や支援の在り方の研修を行っていく際、どんなことを期待しますか。

A3

- 知的障がいのある自閉症、知的障がいのない自閉症もあり、自閉症と言っても障がいの状態によって支援が必要なことは、山ほどあります。それなのに、一律に同じ方法で支援すると、子どもによってはパニックになってしまうことがあります。子どもをパニックにさせない支援が大切です。また、パニックになった子どもを悪者にしないでほしいです。

先生方には、事例を通して支援の手立てを検討し、振り返る研修を通して、様々なケースに対応できる力を身に付けてほしいです。
- 発達障がいの可能性があっても、必ずしも発達障がいとは限りません。この点は十分に注意してほしいです。また、発達支援センターの方や保護者、福祉・企業・医療の関係者を招き、研修を行うことも考えられます。
- 障がいの特性を理解する研修はもとより、「診断名ありきではない支援」や、「子どもの気持ちに寄り添う支援」、「保護者への支援」を考える研修を大切にしてほしいです。
- 事例検討やロールプレイ、心理的疑似体験などの研修をぜひ取り入れてほしいです。

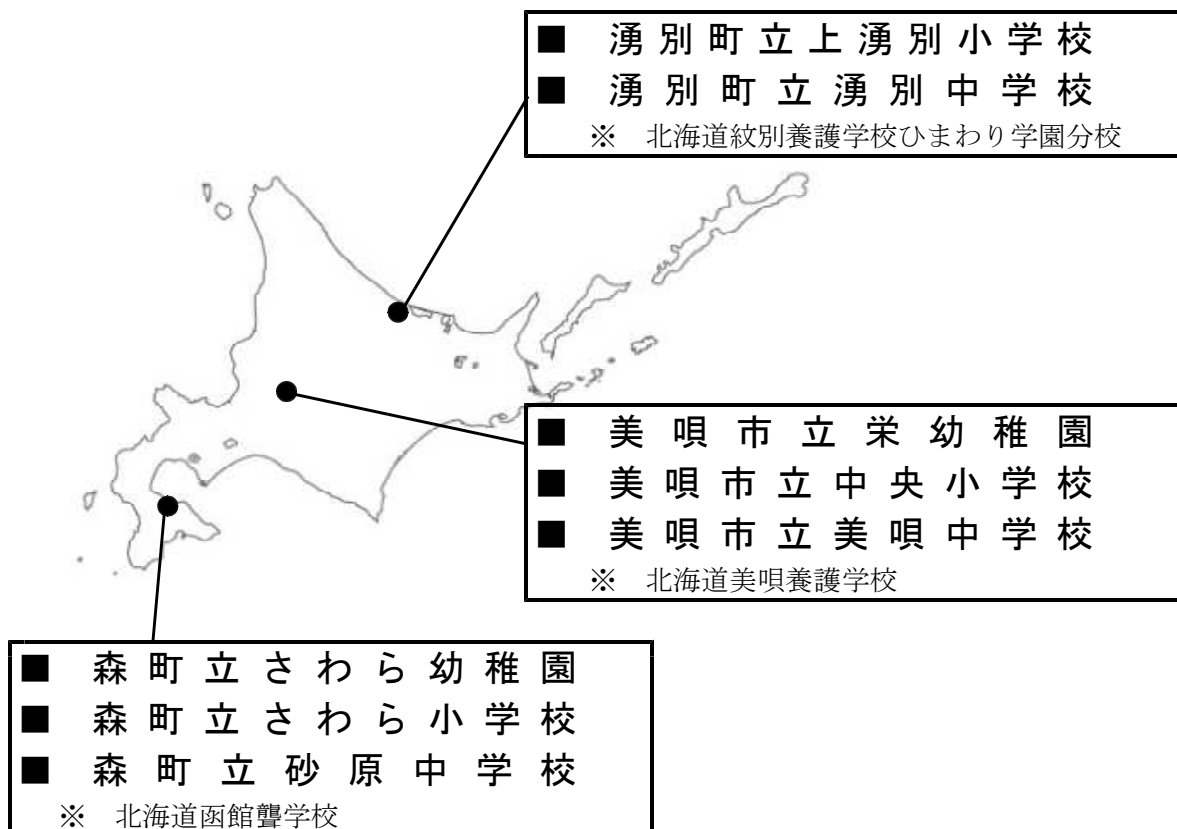
「校内研修プログラム」の作成への御協力

(敬称略)

□ 講師

プール学院大学 准教授 松久 眞実

□ 「発達障がい支援モデル事業」のモデル校 (※関係特別支援学校)



○ 情報提供校

初山別村立初山別小学校、根室市立北斗小学校、別海町立野付小学校

○ 発達障がい専門性向上ワーキンググループ委員

・北海道国公立幼稚園長会	札幌市立きくすいもとまち幼稚園	園長	加藤 貴子
・北海道特別支援学級設置学校長協会	札幌市立小野幌小学校	校長	山田 宏司
・北海道特別支援学級設置学校長協会	札幌市立澄川中学校	校長	加藤 一郎
・特別支援学校長会	北海道真駒内養護学校	校長	福井 一之
・外部専門家	札幌大学	教授	高橋 裕
・親の会	北海道LD親の会連絡協議会	代表	長田じゅん子
・関係機関	北海道立特別支援教育センター	所長	木村 宣孝

発達障がいのある子どもの指導や支援に関する基礎的な知識や技能を習得するための

校内研修プログラム

～「体制づくり」から「指導や支援の充実」へ～

平成２７年３月発行

編集・発行 北海道教育庁学校教育局特別支援教育課
札幌市中央区北３条西７丁目